

RAFAL-AKN 解析例 (2)

熱力学第一法則の確認 (1)

- 計算内容

文献 [1] にある下記の問題を圧力レベルを変化させて解析する。

図 1 に示す断熱壁に囲まれた長方形容器を隔壁で等体積 V に分割し、左側に温度 T 、圧力 p_1 、右側に温度 T 、圧力 p_2 のアルゴンガスを封入する。時刻 $t = 0$ に隔壁を除去した後、十分時間が経過して達成された平衡状態の計算値を理論値と比較する。

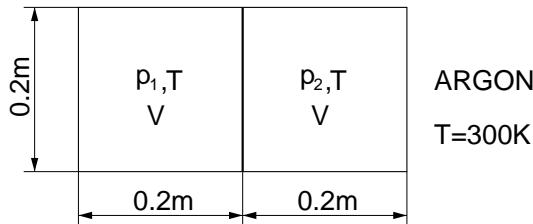


図 1 解析領域

ここで、容器寸法は図 1 に示すもので 2 次元問題として解析する (紙面に垂直方向 1m の領域を解析)。温度 T は $T = 300\text{K}$ とする。圧力は表 1 に示す、 $p_1/p_2 = 10$ の 6 種の圧力レベルとする。

	左側圧力 (Pa)	右側圧力 (Pa)
CASE1	$p_1 = 10^{-4}$	$p_2 = 10^{-5}$
CASE2	$p_1 = 10^{-2}$	$p_2 = 10^{-3}$
CASE3	$p_1 = 1$	$p_2 = 10^{-1}$
CASE4	$p_1 = 10^2$	$p_2 = 10^1$
CASE5	$p_1 = 10^4$	$p_2 = 10^3$
CASE6	$p_1 = 10^6$	$p_2 = 10^5$

表 1 圧力

- 理論解

容器壁面は断熱壁なので、隔壁除去前後で系の内部エネルギーは変化しない。従って、気体が理想気体であれば、隔壁除去前の系の温度 T と隔壁除去後十分時間が経過して平

衡状態が達成されたときの系の温度は等しくなり T となる。

隔壁除去前の左側右側の気体の密度 ρ_1, ρ_2

$$\rho_1 = \frac{p_1}{RT} \quad , \quad \rho_2 = \frac{p_2}{RT}$$

ここで、 R は単位質量当たり気体定数。

隔壁除去前の容器内気体の質量 M

隔壁左右の体積を V とすれば、

$$M = (\rho_1 + \rho_2)V$$

隔壁除去後の平衡状態における気体の密度 ρ

$$\rho = \frac{M}{2V} = \frac{\rho_1 + \rho_2}{2}$$

隔壁除去後の平衡状態における気体の圧力 p

$$p = \rho RT = \frac{(\rho_1 + \rho_2)RT}{2}$$

CASE6 の場合の数値例

隔壁除去前の左側右側の気体の密度 ρ_1, ρ_2 は、アルゴンの気体定数 208.1324(J/(kgK)) より

$$\rho_1 = \frac{10^6}{208.1324 \times 300} = 16.01545 \text{ (kg/m}^3\text{)} \quad , \quad \rho_2 = \frac{10^5}{208.1324 \times 300} = 1.601545 \text{ (kg/m}^3\text{)}$$

隔壁除去前の容器内気体の質量 M は、 $V = 0.2^2 \times 1 = 0.04 \text{m}^3$ より

$$M = (16.01545 + 1.601545) \times 0.04 = 0.7046798 \text{ (kg)}$$

隔壁除去後の平衡状態における気体の密度 ρ

$$\rho = \frac{0.7046798}{2 \times 0.04} = 8.808498 \text{ (kg/m}^3\text{)}$$

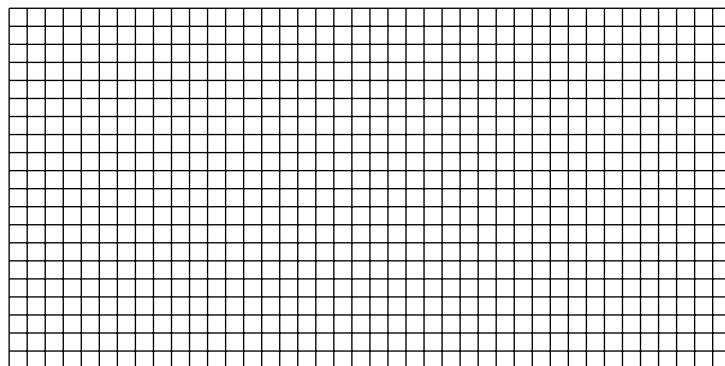
隔壁除去後の平衡状態における気体の圧力 p

$$p = 8.808498 \times 208.1324 \times 300 = 5.5 \times 10^5 \text{ (Pa)}$$

● 計算条件

解析領域のセル分割

図1の解析領域を $40 \times 20 = 800$ セルに分割する。



GEOOMETRY DATA FILE
E:\CELL.DAT

図2 解析領域セル分割図

境界条件

解析領域境界に対応するセル境界を、鏡面反射境界として断熱条件を課す。

速度空間

DVM(discrete velocity method) では、分子速度の空間を有限個の点に離散化して各点における速度分布関数の値を求め、その分布関数から数値積分によりマクロ量を算出する。この時の速度空間の設定を表2に示す。数値積分法は、表2に示す速度空間を表2に示す分点数で等分割した台形公式を用いた。

	速度空間	分点数
CASE1	$[-1500\text{m}, 1500\text{m}] \times [-1500\text{m}, 1500\text{m}]$	51×51
CASE2	$[-1500\text{m}, 1500\text{m}] \times [-1500\text{m}, 1500\text{m}]$	51×51
CASE3	$[-1500\text{m}, 1500\text{m}] \times [-1500\text{m}, 1500\text{m}]$	51×51
CASE4	$[-2000\text{m}, 2000\text{m}] \times [-2000\text{m}, 2000\text{m}]$	51×51
CASE5	$[-2000\text{m}, 2000\text{m}] \times [-2000\text{m}, 2000\text{m}]$	51×51
CASE6	$[-2000\text{m}, 2000\text{m}] \times [-2000\text{m}, 2000\text{m}]$	31×31

表2 速度空間と分点数

CASE6 で分点数が 31×31 と CASE1~5 より少なくなっているのは、計算時間を短縮するためである。

解析時間

隔壁除去後の平衡状態達成までの時間は圧力レベルにより異なる。平衡状態達成と思われるまでの各ケースの解析時間を表 3 に示す。

	解析時間 (s)
CASE1	0.5
CASE2	0.5
CASE3	1
CASE4	1
CASE5	10
CASE6	35

表 3 解析時間

• 計算結果

隔壁除去後、表 3 に示した時間が経過した時点での解析領域内のマクロ量の 800 セルの平均値を表 4 に示す。

	密度 (kg/m ³)	流速絶対値 (m/s)	温度 (T)	圧力 (Pa)
CASE1	8.808×10^{-10}	1.016×10^{-2}	300.0	5.500×10^{-5}
CASE2	8.808×10^{-8}	9.640×10^{-14}	300.0	5.500×10^{-3}
CASE3	8.807×10^{-6}	2.229×10^{-13}	299.5	5.490×10^{-1}
CASE4	8.808×10^{-4}	2.040×10^{-12}	299.9	5.498×10^1
CASE5	8.807×10^{-2}	1.374×10^{-2}	299.0	5.481×10^3
CASE6	8.807	1.247×10^{-2}	298.5	5.472×10^5

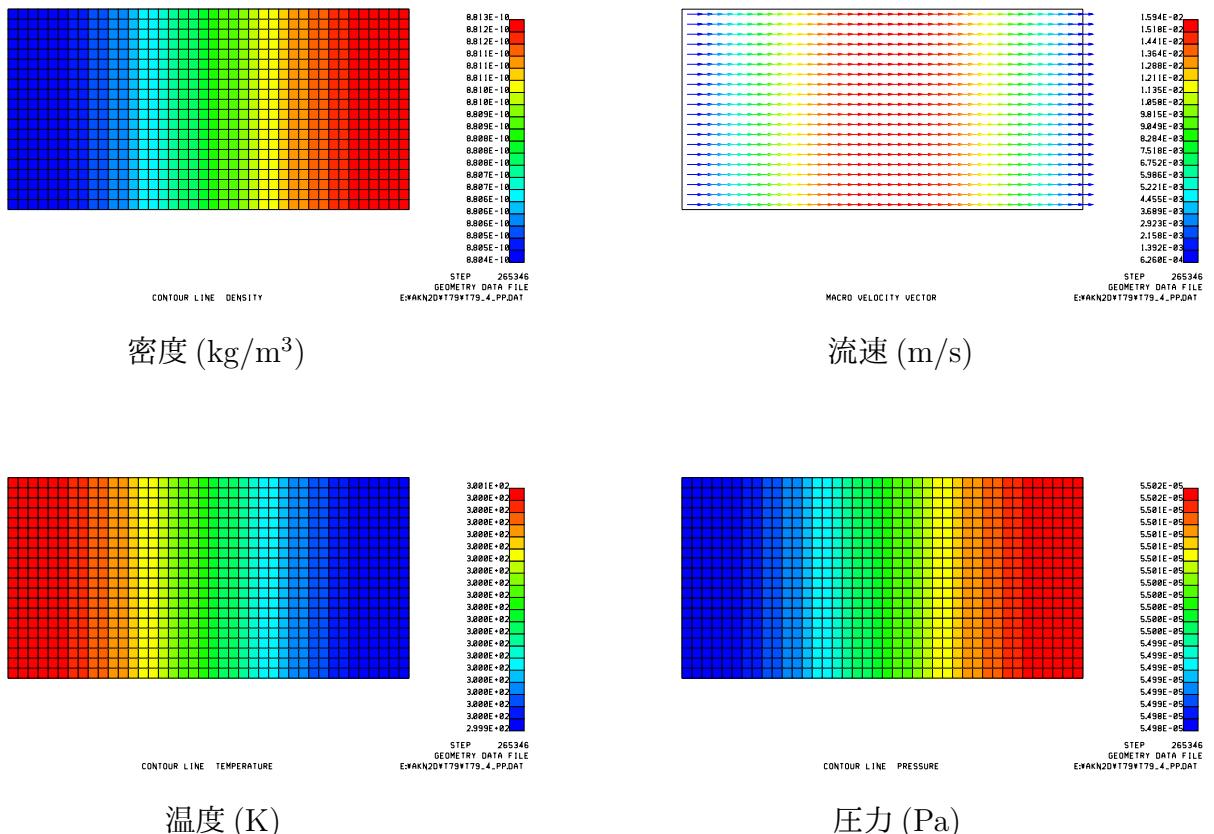
表 4 マクロ量の平均値

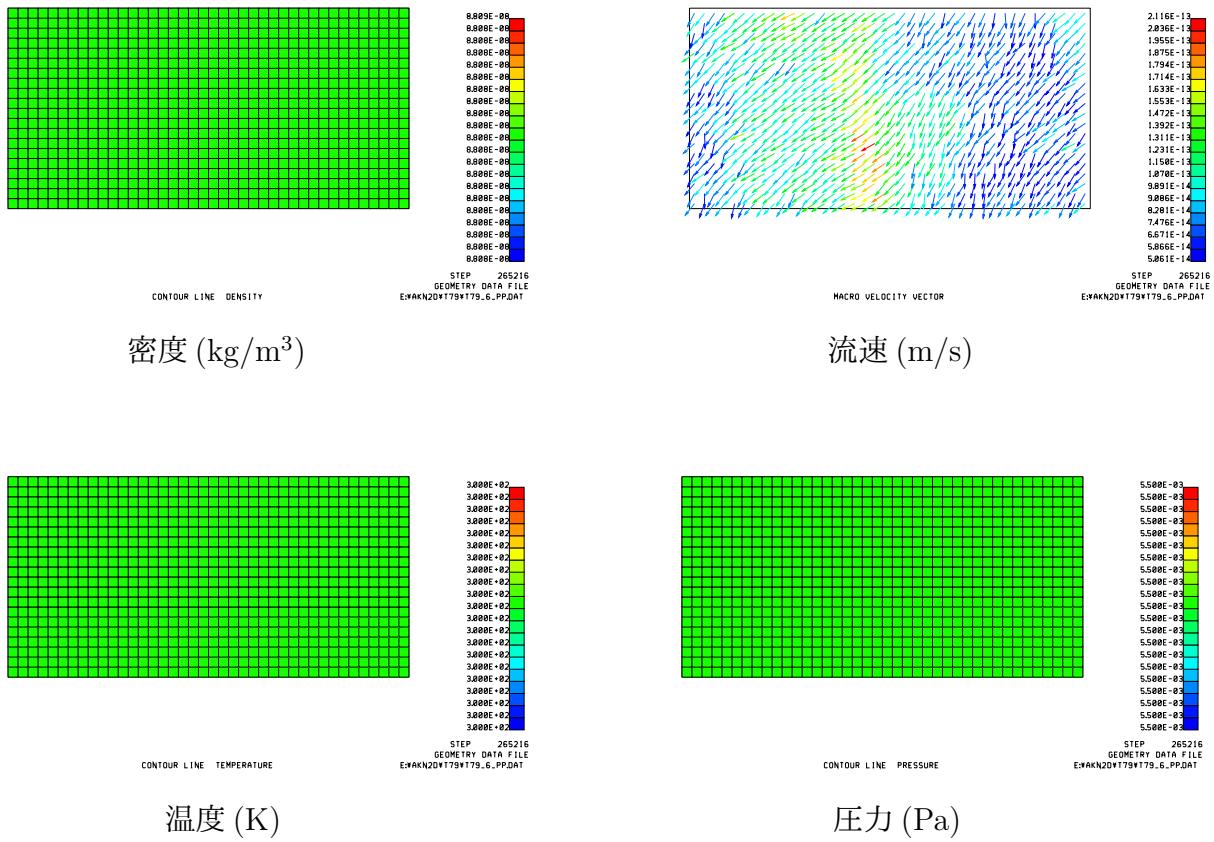
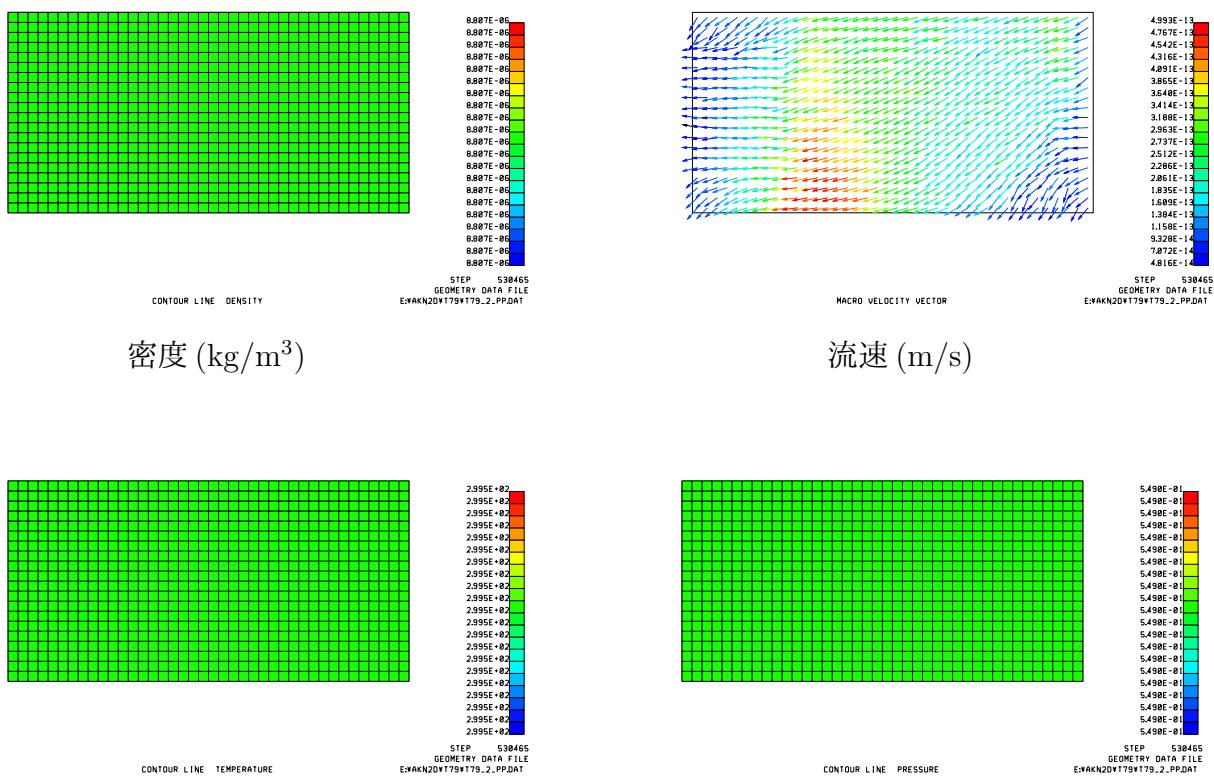
表 5 に計算値の理論値に対する相対誤差を示す。

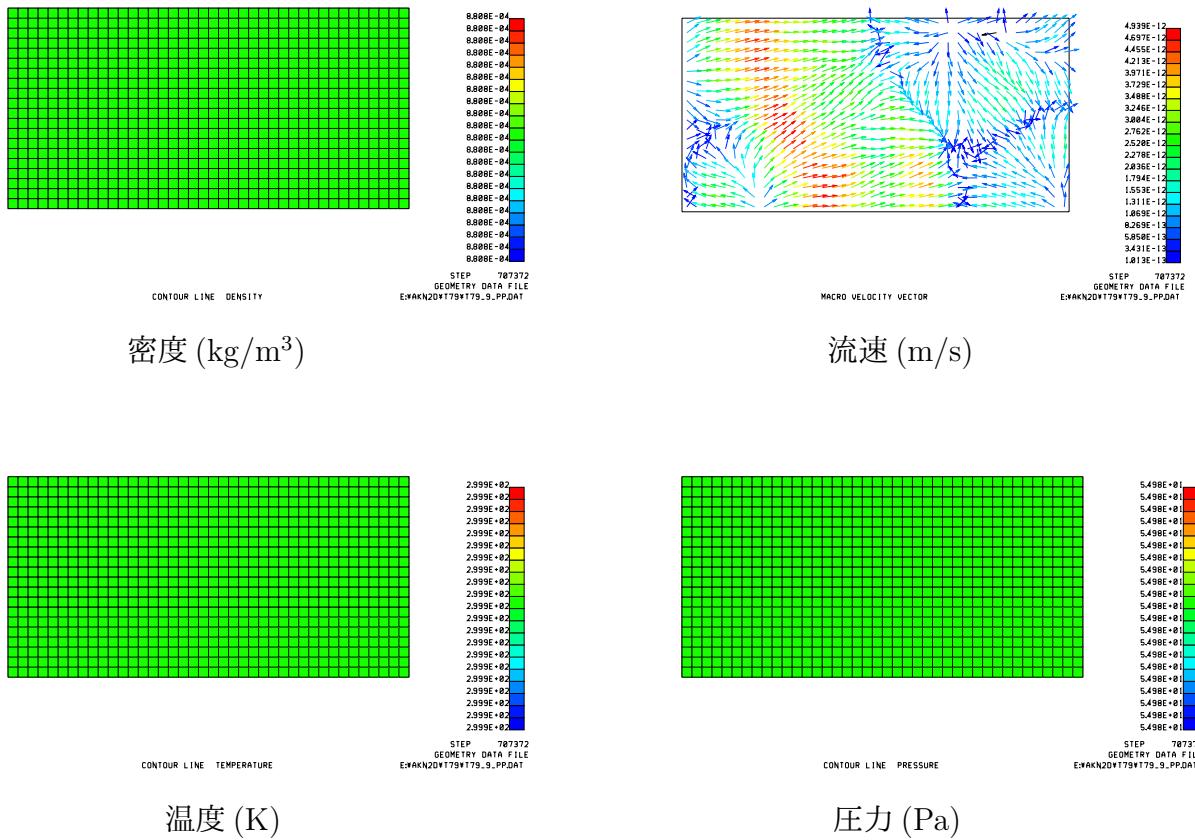
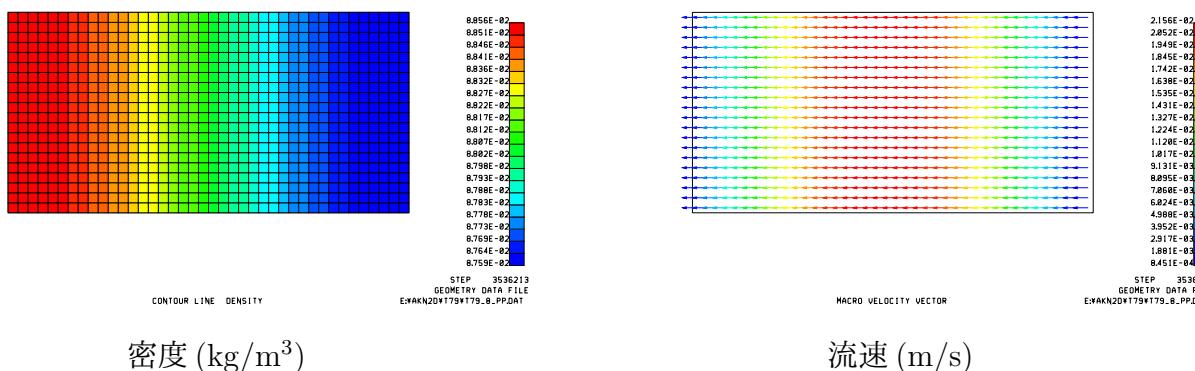
	密度	温度	圧力
CASE1	-0.0057	0	0
CASE2	-0.0057	0	0
CASE3	-0.017	-0.17	-0.18
CASE4	-0.0057	-0.033	-0.036
CASE5	-0.017	-0.33	-0.35
CASE6	-0.017	-0.50	-0.51

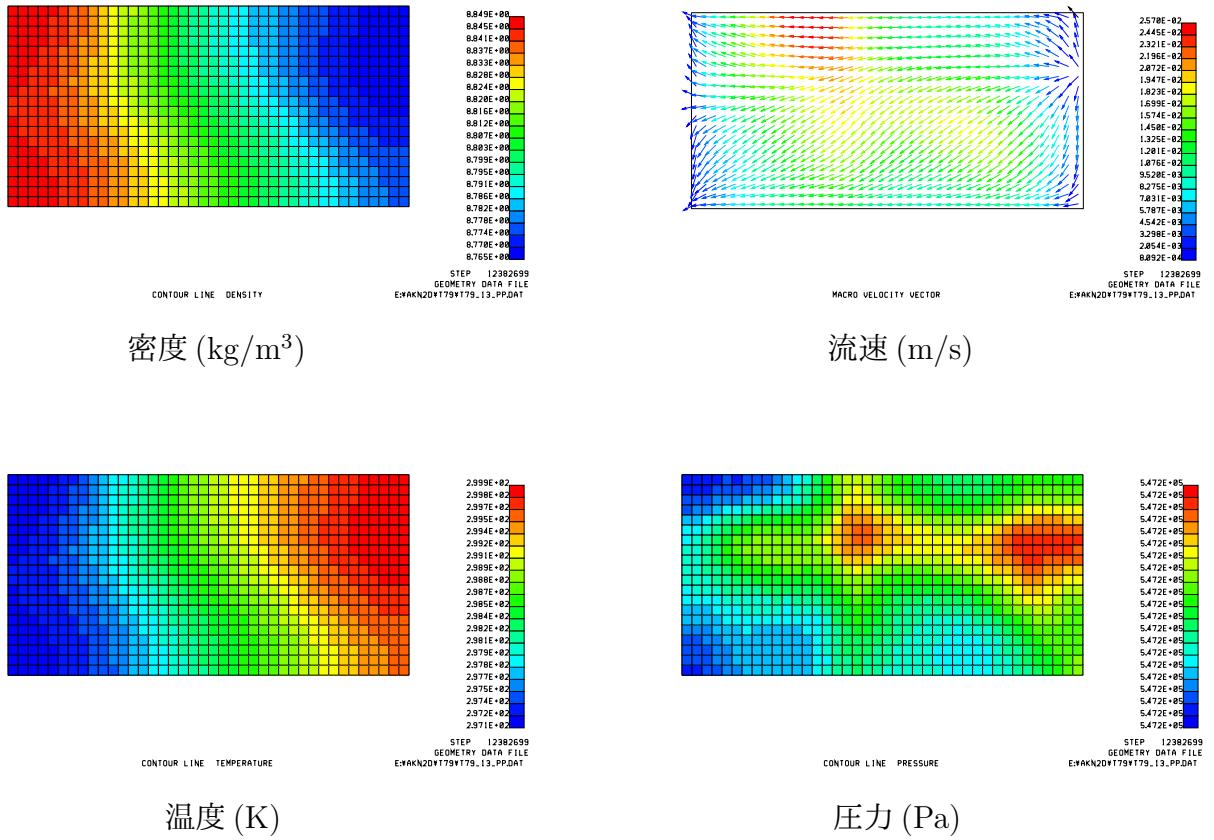
表5 マクロ量計算値の理論値に対する相対誤差 (%)

隔壁除去後、表3に示す解析時間が経過した時点でのマクロ量の分布を図3～図8に示す。

図3 CASE1 (左側圧力 = 10^{-4} Pa, 右側圧力 = 10^{-5} Pa)

図4 CASE2 (左側圧力 = 10^{-2} Pa , 右側圧力 = 10^{-3} Pa)図5 CASE3 (左側圧力 = 1Pa , 右側圧力 = 10^{-1} Pa)

図 6 CASE4 (左側圧力 = 10²Pa , 右側圧力 = 10Pa)図 7 CASE5 (左側圧力 = 10⁴Pa , 右側圧力 = 10³Pa)

図 8 CASE6 (左側圧力 = 10^6Pa , 右側圧力 = 10^5Pa)

• 検討

- ・圧力レベルが低い程、平衡状態達成までの時間が短くなっている。これは圧力レベルが低い自由分子流領域では、隔壁除去後の流れは隔壁左右から相手側への分子の単なる移動過程であるのに対して、圧力レベルが高い連続流領域では、隔壁除去後の流れは衝撃波管問題となり、衝撃波や膨張波の発生、反射、干渉などの複雑な現象が起り、それが収まるのに時間が掛かる事に対応している。
- ・表4,5によればマクロ量の800セルの平均値は、全ケースでほぼ理論値と一致している。ただし、圧力レベルの高いCASE5,6では流速ベクトルが大きく温度、圧力の理論値との一致が悪いのは、解析時間が短く平衡状態が完全には達成されていないためと思われる。一方、圧力レベルが一番低いCASE1で流速ベクトルが大きい理由は不明である。
- ・図3~8によれば、圧力レベルの低いCASE1,2,3,4では密度、圧力、温度はほぼ一様であるのに対して圧力レベルの高いCASE5,6では若干の分布がある。これは前項と同様の理由によると思われる。

流速ベクトルは、CASE2,3,4では絶対値が $10^{-12}(\text{m}/\text{s})$ 以下で理論値ゼロに対する誤差となっている。CASE1,5,6では流速ベクトル絶対値が $10^{-2}(\text{m}/\text{s})$ 程度で、CASE1,5では

流速ベクトルの方向はほぼ x 方向 (解析領域長手方向) となっているのに対して圧力レベルが一番高い CASE6 では 2 次元的な流れとなっている。圧力レベルが高い場合、衝撃波や膨張波による複雑な過程を経て平衡状態が達成されるが、現象は 1 次元なので 2 次元的な流れとなる理由は不明である。

• 文献

- [1] リープマン・ロシュコ著, 玉田 訳: 気体力学: 吉岡書店 (1971), pp.16-17.